



発達保障って なんですか?!

大切にしてきた実践記録

『みんなのねがい』ははじめから障害者、父母の生活記録、教員の実践記録を大切にし、積極的にとりあげるようにしてきました。障害をもった子どもを育てるといふのは並大抵のことではなく、両親のご苦労はかんとんに書けるものではありません。しかしその育ての記録からわれわれは多くのことを学ぶことができます。

同様に先生たちの実践から学ぶことも多い。とはいっても障害児教育は歴史が浅い。障害も多様。実践記録から直接役に立つものを探し出すのは難しいです。私が教師になった頃は、障害児教育の本は何もありませんでした。普遍的なものは何もない。だから通常教育の実践記録に学ぼうと、そういう本ばかり読みました。そこからは障害児の実践をどうすればいいかという答えは出ません。それをヒントにして、工夫して今何をすればいいのかを考えました。

今はたくさん本が出ています。こういうときはこうすればいいというような「親切」な本もあり、障害が目について、どういう働きかけがよいのかということ、ハウツーものに頼ってしまうこともあります。それでいいのかな、と

いのが私の永遠の疑問です。「親切」な本がたくさん出ている反面、障害児学校の実践記録はあまり目にすることはありません。

また、毎日の授業を複数の教師でとりくむことが多くなっています。一人担任だと、授業の結果がすぐに跳ね返ってきますが、大勢で授業すると一人の失敗をみんなでカバーできるので、少々間違っても子どもに影響が生まれません。複数でとりくむことによって実践はゆたかになっていきますが、関わりと結果の因果関係が見えないので、教師の質が高まらないのではないかと思います。よいとか悪いとかの問題ではないのですが、集団の実践を集団で書くというのは難しい。教師の個性的なとりくみが消えてしまうこともあります。

文学全集を書店で見ることが少なくなりました。深く心にひびく文学が少なくなっている気がします。ハウツーものも多く、時間をかけて一冊を読み切るということも少なくなっているように思います。私は本が好きで、早く寝ると親にしかられながら夜中まで本を読み続けたものです。心を揺さぶられるような文学に感動し、少しずつ自分がつくられてきたような気がします。実践記録も同じで

す。一つひとつのとりくみで、子どもが変わっていった、その時に受けた感動が教師としての自分をつくっていったと思うのです。

今の世の中、深く読むことが求められる文学や、実践記録などは敬遠されているのでしょうか。私が教師になった頃は一人担任でした。小学部の先生は子どもを帰した後、教室で採点や授業準備、教材づくりなどをしていました。私は言語指導でしたから、どのクラスにも関係がある。話を聞きたい先生の教室を訪ね、子どもの見方、障害や心、力などいろいろ教えてもらいました。

しかられて育てられる

私が養護学校に勤め始めた頃はお母さんたちが教室の後ろに並んでいて、ノートをとったり、ページをめくったりする介助をしていました。その手がないと授業は進まない。いつも圧迫感を感じていて、自由にもが言えず、脱線、雑談もできませんでした。一人でなんとか進めようと「お母さん、ろうかに出ていってください」と言ったことがあります。でも、ノートに書くことができない。数日後、お母さんたちからしかられました。「やっぱり書かないと覚えられないですよ」と。

松本 昌介さん (下)



まつもと しょうすけ

1936年東京生まれ。長年、都立養護学校の教員として肢体不自由児教育に携わる。全障研経営委員、全国肢体障害者団体連絡協議会役員など歴任。著書に『実践記録集 肢体不自由教育覚え書き』など

そのほかにも授業で失敗して何回も失敗しました。新米教師はそうやって成長していくものではないでしょうか。最初に担任したときのお母さんたちにしかられた一つひとつが強く胸にひびき、今でも記憶に残っています。母たち、先輩教師たちに教えてもらったことはその後の長い教師生活で役に立ちました。身体ががたがたになっても定年まではたつきつづけられたのはそのときの力が支えになっていったのだと思います。

実践で大切にしてきたこと

学校行事のねらいに、よく「楽しませる、思い出をつくる」とい



▲▲当時の授業風景



う言い方をしたりしますが、両方とも僕はあまり好きではありません。学校は、一人の人間の貴重な十何年間かの中に、その先何十年と生きていく力をつけるために親は苦勞して学校へ送り出してくれています。力をつけるのが学校だと思っています。「修学旅行に行つてよかったね」だけではなく、何を獲得したか。楽しむのは前提として大切です。でも、その土地のことを学び、空気のちがいが、見て歩くモノのちがいを見なくてはいけない。それが自分の宝にならなくてははいけません。授業で年齢やその子の力に応じて覚え方、教え方はちがいます。

積み上げてきて、そしてある時に芽が出てくるんです。たとえば運動会の時に初めて歩けるようになったという子が結構います。それはそれまでの積み上げがあったから歩けるようになったわけで、何もしないでいきなり歩けるようになるわけがない。その日の前にも、歩けるようになるに近いものがたくさんあって、めざして、組織して、そういった力がその日に結果するんですね。だから僕は、思い出づくりだけではなく、もう少し教育的な理念で授業づくりや行事のことを考えていかなくていけないと常々思っています。

* *

子どもはみんな一個の人間ですからね、いかげんではぶつかれない。教師も子どもにほんとに腹を立てる。それこそが教育だと思つています。子どもとの距離をもつと縮めたいんです。今は「勝手なこと」をやる人が育ちにくくなつていきます。実践では、遊び心と厳しさが大事。ハウツーになると実践が乏しくなります。私は学校に行くのが楽しかった。それは今の時代は難しいことだと思われのはいやですね。

今、子ども同士のトラブルは避ける傾向です。子ども同士のぶつかりあいを、臨機応変にとらえて

いく。そこは意図的でした。ケンカも学校でつきたい力。自分で言いたいことを言える。そうじゃないと将来困ると思っています。ケンカは必要なんです。

子どもだけでなく、先生同士、親との関係もトラブルにならないようにしています。それは怖いですが、心からしてちがうんだから。ちがったらちがったでぶつかりあって、話し合つて考えていけばいいんです。

さらに、自分の学校のなかだけでは考え方が狭くなってきます。今は、学校が忙しくてあまりできないと思いますが、負けないで、目を広げることがやってもらいたいなと思います。障害児教育というのは、非常に狭い社会です。そうするとね、いくらわれわれが大きな声を出したって、学ぼうとしたって、やっぱり限度はある。

今は障害児教育の分野、それ以外でもいろんな人がいるから、学校外の仲間や先輩から学んだり、もつともつとまわりで勉強会やサークルをやったりしながら学びあうことをしてほしいのです。教師を選んだ以上は、子どものために、という志はぶれずにやってきました。教師はいつまでも学びつづけなければならぬと思つています。